



～夢を育てる学校 自慢の学校～

国立二小だより

平成28年6月1日

国立市立国立第二小学校

校長 小林 理人

共生社会に向けて 共感・感じ合うこと

校長 小林 理人

5月26日から三重県の伊勢志摩で米国、英国、フランス、ドイツ、イタリア、カナダ、日本のリーダーが集まり、サミットが開催されました。サミットでは、環境や経済、人権問題等の国境を越えて地球全体で考えなければならない課題について話し合わせ、我が国はホスト国として会議の進行や調整を行うとともに、来日している世界各国の方を「おもてなしの心」でお迎えするという大任を担いました。地球上の人々が共に理解し合い、共生、共存するための知恵を出し合い、我が国から共生社会の実現に向けての方向性を世界に発信できることは誇らしいことです。

共生社会の実現に向けての第一歩は、共に生活をする人たちの思いを感じ合うことだと思います。私には、そのことを心に刻んだ思い出があります。それは、私が子供と関わる教員という道を選ぶきっかけの一つとなった出来事です。

学生時代、知人の紹介で障害のある児童施設の遠足に付き添いとして参加をさせていただきました。行った先は飯能河原で、身体に麻痺があり、会話によるコミュニケーションと歩行が困難な子供の介助を担当させていただきました。

大学に入学したばかりで、小さな子供と関わる経験もなく、どう接してよいか分からず途方に暮れていた私に、施設の方から川の水に触らせてあげたらとの助言がありました。「川に入りたい・・・?」「一緒に入ってみる?」などなんとか言葉や身振りで気持ちを伝えようとしたのですが、全く伝わりません。そして、私と同じ介助者がしているように背中を向けて腰を下ろしてみると、その子は車いすから降り、私の背中におんぶをしました。

私は何の疑いもなく「川に一緒入ろう。」という意思表示だと思い、うれしくなって川に向かって歩き始めました。するとその子は少し困ったような顔をして「うーっ うーっ」と声を出して何かを訴えようとした。私はその訴えを自分勝手に川に入ることへの戸惑いと判断し、「大丈夫だから・・・。」「怖くないよ・・・。」「足だけ水に触ってみようよ。」と言って川に入り、その子の足先を川の水にそっとつけてみました。

その時です。私の背中に何か温かいものを感じました。冷たい川の水とは違う感覚に何が起きたのかを理解し、その子の気持ちを感じ取れなかったことへの罪悪感で胸がいっぱいになりました。そして、せめてもの償いのつもりで、その子の腰のあたりまで水につかる川の真ん中まで歩を進め、周りの人に気付かれないように腰のあたりを川の水で洗い流しました。

川から出て、車いすに戻ると施設の方が「〇〇ちゃん、ズボンまで濡らしちゃって・・・川の水は冷たくて気持ち良かったでしょう。」と笑顔で迎えてくれました。

私を見つめるその子の顔は笑っていました。そして、私も引きつった笑顔でその子に応えました。

一期一会、その後、その子と会うことはありませんでした。その子の笑顔で伝えたかった気持ちは何だったのかな。今でも忘れることができない子供の笑顔です。

あれから30年以上が経ち、心を感じ合うことの大切さを伝える立場になりました。しかし、今でも子供たちを含め、共に生活をする人たちの思いを感じ合うことの難しさを感じる場面がたくさんあります。共感するための自分磨きにはゴールはありません。

6月は「ふれあい月間」です。ふれあい月間は、友達の心を感じ、人や物に思いやりや優しさをもって関わることを意識して生活をします。そして、団結し、強い絆をつくった学級、学校を優しい言葉と笑顔の花でいっぱいになるような学校生活をめざします。